

こころを乱したお通の介護のため、ムサシは小さなマンションを借りて暮らし始めた。しかし、この不景気下、定食など食べることはおろか、すぐに見つか  
るものではない。ムサシは闇金から借金として糊口をしのぐ生活を送っていた。  
「ハハハ、ムサシィ・見てよ、この鏡ヘンだよハハハ、鏡の中のアタシが  
アタシを見て笑ってるよアハハハ、何がそんなにおかしいのサ！ ああ、今  
度は怒ってるう！ アハハハ・」 「お通・・いたわしや・」 (ピンポ  
ン) 「すんませろん、宅配便ですう」 「ただいま！・あっ！」 「ムサシはん・・  
探しましたで・」 「借りた金はキツチリ返してもらわんと・」 「すんま  
へん・・嫁はんがこんな調子でさっぱりワヤだんねや」 「それはこっちは関  
係のないこつちやう。このままやったら奥さんにもっと辛い目エ見ってもらうこ  
とになりまっけど、それでもよろしおまんな？」

「それだけは堪忍しくんなはれ！」 「ふんっ！ タマキンかなんか知らんけど」  
「お通・・ヤミキンや・」 「ヤミキンはなんぼのもんやねん！」 「なん  
ぼ？ 元金、利息合わせてもう300越えとりまっせ。しかし、奥さん、カネ  
の話になつたら正気に戻るみたいでんあう」 「ムサシはこの言葉に驚愕した。  
お通は自分をとどめおくために病を装っているのかも知れないと疑い始めたの  
である。」